

価値尺度と文化階層

都築 一治

【要 約】

社会階層現象に関して「文化」の効果を理論的に整除したのは、フランスの社会学者ピエール・ブルデューであった。彼は主著『ディスタンクシオン』において、文化資本を鍵概念として、その継承関係が階層の再生産と深く結びついていることを示すとともに、文化資本の様態を具体的な事例や多変量解析の技法を使ってあきらかにしている。

ブルデューの枠組みにおいては、支配階級の文化が優位して、庶民階級の文化は「引き立て役」の位置にとどまっているように見える。しかし社会階層現象を考える上で、支配文化に直交するような庶民階級の文化の存在が不可欠だと考えられるようなことがある。それは、支配階級文化の100%の浸透を阻み、見えないかたちで社会の在り方が規定しているようなもの——強力に社会を覆うビジブルな支配文化にたいして、見えにくいことでその影響を感じにくいのではあるが、社会全体の半分の構成員に関わるような可能性がある。

本論は、文化システムを価値尺度の集合として定義し、異なる文化システムの関係性を価値尺度間の空間的配置として概念化し、支配文化とは異なる安定した文化の存在を仮説する。その上で、日本の文化状況についてデータ分析を行い、価値尺度間関係について考察を加える。

キーワード：文化体系、価値尺度、価値尺度の類似性、価値尺度間の角度、価値尺度空間

1. はじめに

2009年7月31日付の朝日新聞の朝刊「親の年収 進学率左右」には東京大学の大学経営・政策研究センターが行った調査結果が紹介されている。記事によれば、親の年収階

層を7段階に分けて子どもの進学率を計算すると、もっとも年収の高い1,200万円以上の階層の進学率が62.8%であるのに対して、もっとも年収の低い200万円未満の階層の進学率は28.2%であり、所得階層による進学機会の格差が際立っている。

同記事のなかで、調査を行った大学経営・政策研究センター長・金子元久教授は「このままでは大学教育を受けられる人が所得の階層で固定化してしまう。進学したくてもできない人を支援するセーフティネットの政策を作る必要がある」とコメントしている。2000年を過ぎるころから、学歴達成の階層差が社会的な問題として取り上げられ（荻谷 2001など）、ゆとり教育批判も加わって、この問題は一般にも大きく認知されるようになってきた。

かねてから親の年収が1,000万円を越えている東大生の割合が高いなどの報道もあり、この記事のもととなった調査は「階層と教育」の関連をさらに精密に明らかにしたものとして、「なるほど」と思えるところがある。しかし、気になるところもある。それは、1,200万円以上の年収がある親の子どもの大学進学率が62.8%であるところだ。「受験浪人・未定」が10数%あるので、進学予備軍としてこれを加えても75%でいどであり、まだ100%には遠い。年収1,200万円あれば、子弟を進学させることの経済的障害はまず無いと考えられる。大学は「全入時代」を迎えて受験ははなはだしく軟化し、選ばなければ大学入学できる可能性は著しく高い。にもかかわらず、なぜ100%ではないのだろう。

年収でとらえた階層差が大学進学に大きくかわるとしても、それは完全な関係ではない。子どもの進学には、家庭の経済状況や本人の学力とは別の要因が強く関与している疑いがある。その要因は、年収200万円未満でも30%近くの子どもたちを進学に導き、逆に、年収1,200万円以上でも1/4以上の子どもたちを進学から遠ざけている。本稿は、この要因の解明を目的としている。

2. 2つの文化集団

2. 1 学歴分断線と「上下半々」の人びと

吉川徹『学歴分断社会』（2009）は、日本の社会階層構造を規定しているのは学歴であり、とくに大卒／非大卒の「学歴分断線」が格差の主成分となっていると主張している。大学に行く／行けるか、行かない／行けないかによって、職業的地位・威信、所得、生活機会などが分断されているという興味深い主張である。この主張のほとんどで学歴分断線は主要な役割を果たしているが、一部にやや疑問に思えるところがある。7章「逃れられない学歴格差社会」において、学歴構成の年次変化が示され、かつては、大卒／高卒／中卒が3割ずつくらいであったものが、2005年の新入生では大卒／非大卒が半々くらいになり、2025年ごろまでにはすべての世代で学歴分断線が日本社会を上下半々に分けるようになる、と述べられるところである。問題は、学歴分断線が「あらゆ

る世代を上下半々に切り分ける状態」が「学歴分断社会の本格的な到来」と表現されているところだ。

学歴分断線そのものが重要だとすれば、それがどこをどのように分断してしようと、切り分けられた上下の階層に沿って生じる格差現象が本質的なはずである。しかし学歴分断線が人びとを半々に分けること＝「学歴分断社会の本格的な到来」というなら、学歴分断線が上下半々の区分にシンクロすることが重要であると読める。ニワトリとタマゴ、学歴分断線と上下2つの集団、どちらが先なのだろうか。

2. 2 学歴下降回避メカニズム？

吉川は大卒／非大卒学歴の親子類型について、「大卒再生産家族」「学歴上昇家族」「学歴下降家族」「高卒再生産家族」の4つが将来的には、35:15:15:35のような割合に収束していくだろうという予測を示している（前掲：152）。この関係の固定性は、「学歴下降回避のメカニズム」⁽¹⁾で説明できるといえる。

「わたしたちの多くは、親と同じかそれ以上の学歴を得たいと望んでいます。すると親が高卒層である場合は、高校卒業が確定した時点で、親よりも低い地位になることは免れたことになります。そのため、そこからさらに勉強に励んで大卒学歴を得ることは、合理的とはいえません。

けれども、大卒層の親を人生のスタート・ラインとする場合、もし大学に行かなければその時点で親の学歴には届かないということになってしまいます。だから親が大卒である家族では大学進学が強く動機づけられるのです。」（同：153）

この仮説はかなり疑わしい。もしこの仮説が厳密に正しいとすれば、親が高卒層である場合、子どもも学歴は高校卒までとなり、「学歴上昇家族」は生まれない。また学歴インフレーションが進行する中では、親との単純な学歴比較は意味をなさないし、そもそも進学への動機づけは、子どもが学歴下降を避けるよう「合理的な判断」をする以前から、家庭内で行われている可能性が高い。「選別は幼児期からはじまる長い時間のなかでの一連の累積的な過程であり、当の行為者の意識をこえる」（宮島 1994：89）のである。子どもの学歴下降回避は合理的な選択ではなく、選好形成の段階にある。「大学進学はあたりまえ」という環境で育てば、大学進学を目指すと考えほうがより直截的である。

同じように「大学進学はあたりまえ」でないという環境で育てば、大学進学は他の進路との選択の対象になるだろう。「高卒再生産家族」について吉川は、「こんにちの高卒再生産家族には、あえて親と同じような人生を歩むことで安定を得ようとする側面があるのです」（前掲：202）と述べ、大学進学にともなって親元・生まれ育った地域から離

れることと、それまでの生活基盤をそのまま延長することとを比較して、後者を選択する層が「高卒再生産家族」の一定の割合を占めるとしている。これを学歴上昇回避という合理的選択としてとらえることもできるが、むしろ何を自明なものとするか、生活世界をどのようなものとして見るかといった世界観の問題と考えたほうがわかりやすい。大学進学に動機づけられるか否かは、人びとが異なる選好をもつことを仮定することでよりよく説明できる。それは「学歴の象徴的価値」⁽²⁾を信じるか否かに影響を与える集団文化の問題である。

2. 3 2つの下位文化—オタク文化とヤンキー文化—

社会が階層的に構成されているとして、少なくとも2つの文化的に異なる集団が形成される必然性がある。都築（2004）に示したように、社会が支配・服従の関係でつながれた階層構造をとっているとすれば、最下層だけには「支配しない」というその他の層とは異なる性質がある。支配から疎外された唯一の集団は、支配・服従関係が基本となる社会の正統な文化とは異なる文化を発達させる可能性がある。

多くの社会には、支配的文化とは異なる文化的背景にある人びとがいる。イギリスの労働者階級、ブルデューが「庶民階級」と呼ぶ人びと、エーレンライク（1989=1995）が「サイレント・マジョリティ」と呼ぶアメリカの白人労働者を中心とする階級、日本にも同じような階層があってもおかしくはない。およそ人口の半数を占める階層であるにもかかわらず、支配権力を求めて上昇することを主要な価値としない文化集団であり、ふだん支配文化のもとにいる私たちの意識にのぼってこない人びとである。

前掲した年収と大学進学率に関する記事が掲載された直後、朝日新聞2009年8月1日付朝刊文化欄に「ヤンキー文化論、なぜ注目」（浜田奈美）と題する論述が掲載された。オタク文化と対比されるヤンキー文化のキーワードの一つは「若者の地元志向」であり、地域にとどまり親の生活基盤と地域文化を継承する生きかたという意味では、吉川のいう高卒再生産家族の一部の生きかたと重なる。オタク文化もヤンキー文化もサブ・カルチャーと見なされているが、それは同時にそれぞれに対応するメイン・カルチャーがあることを意味している。

記事に紹介された難波功士『ヤンキー進化論』（2009）の帯には「日本人の5割はヤンキー!？」というキャッチコピーが記されている。それは本文中のナンシー関の引用（同：19）から来ていると思われるが、それはヤンキーそのものが5割ということではなく、ヤンキー文化に共感し広い意味でヤンキー文化を包摂するような文化的背景にある人びとが5割いると解釈できる。「5割」という数字は、吉川の上下半々という主張と対応している。

社会が大きく2つの文化集団から構成され、その一方が支配文化集団であり、もう一方がそうでないとすれば、格差現象がその集団区分に沿って生じているのは当然である。

大卒／非大卒の学歴分断線が重要な役割を担うように見えるのは、今やこの区分にシンクロし始めているからではないだろうか。この区分とシンクロする性質をもっているという意味で、学歴はこの社会の支配・被支配関係を規定する基本原理だということができるかもしれない。しかし、大卒／非大卒の区分はたまたま集団の構成比に重なるだけで、本質的ではないのではないかと——さらに言えば、分断線はほかにも上層に何本があり、多層的に人びとを分割している——のかもしれない。かつては、高卒／中卒分断線がその役割を果たしていたかもしれないし、旧制中卒／高等学校卒分断線が重要であったかもしれない。

3. 価値尺度と文化集団

南田・辻（2008）は、文化の定義において「広義の文化」と「狭義の文化」を分け、前者を解明しようとする文化社会学は「具体的な社会生活のあらゆるところに文化的な側面があることを引き受け、個別の対象にまわりつく行為の意味や価値の側面、社会意識を研究対象とすることを本義としてきた」（同：4）と整理し、後者については「人の手によって創造された対象物（記録物文化、文化的表象体）、それらを送り届けるメディア、そこにまつわる受け手と、受け手の人びとに用意された空間。これらが文化社会学の射程であるということが近年になって主張されはじめた」（同：5）と述べて、研究には2つのタイプのありうることを示している。この区分にしたがえば、以下の分析は「広義の文化」についてその形式的側面を定式化することを目指している。

ところで、文化をどのように定義すべきだろうか。たとえば『新社会学辞典』では「社会」と概念的に区別される「文化」の定義として、「文化」として概念化される要素を取りだせば、それは社会の成員の行為、思考および社会自体の目標や価値を方向づける象徴＝価値体系ということになる」（新社会学辞典：1292、宮島喬）としている。ある文化のなかにあることが、大学進学のもちづけを与えたり与えなかったりするとなれば、文化とは何に価値があるか無いかを判別する価値体系であるという定義は適格的である。ここでは、こうした考えのもとに価値体系を定式化する。

3. 1 価値尺度の定式化と文化間の類似性

価値体系を、その文化において識別されるすべての対象を価値序列化するものであるとしよう。すべての識別対象が一元的に序列化されるのではなく、たとえば、美術作品と食べ物のように別の基準にしたがって序列化されるとすれば、価値体系は序列の集合ということができる。識別対象の中の一群のものを価値序列化する関数を「価値尺度」と呼ぶとすれば、価値体系は「価値尺度の集合」である。

ある価値尺度で価値が弁別される対象集合を $X : \{x_1, x_2, \dots, x_n\}$ とする。Xを定義域と

する価値尺度 S_j は価値空間 V_j への関数である ($S_j: X \rightarrow V_j$)。価値空間 V_j は複雑な構造をもった価値カテゴリーの集合でもよいが、基数値あるいは (2 値を含む) 序数価値序列が単純である。

$$S_j: x_i \rightarrow v_{ij} \text{ (基数・序数) } \{i=1, 2, \dots, n\}$$

文化が異なることは価値序列が異なることを意味するのだとしたら、異なる文化では X を価値空間に写像する価値尺度も異なることになるだろう。ただし、異なる文化があるということが識別対象をまったく共有しないことを意味するなら、この議論は成立しない。もちろんそうした文化のあり方を想定してもよいが、現存する複数の文化集団間にはある程度のコミュニケーション可能性が存在する。その場合、少なくとも部分的には識別対象が共有されていると考えてよいだろう。また、ある文化では識別されているものが、別の文化では識別されていないということ—たとえば、ノータック・パンツもツータック・パンツもいずれも「パンツ=ズボン」としか認識しない—がありうる。しかし、その場合にはそれらの対象を識別しない文化における価値空間上に両者が同じ位置を占める—ノータックでもツータックでも同じ価値—と見なせば、差異が識別されないものを含む一群の識別対象にたいして 2 つの文化の価値尺度を比較することができる。

ここで、ある対象集合 X があって、その要素すべてを価値空間に写像する価値尺度が 2 つある—たとえば $S_j \cdot S_k$ —とする。 $S_j \cdot S_k$ が写像する価値空間 V_j と V_k がともに序数集合 (あるいは基数集合) であるとき、価値尺度 S_j と S_k の類似は $X = \{x_1, x_2, \dots, x_n\}$ の要素が V_j と V_k に写像された配置の一致度で判定されるとしよう⁽³⁾。具体的には価値尺度 S_j と S_k の類似度を、価値 v_{ij} と v_{ik} ($i=1, 2, \dots, n$) の相関係数によって定義する。相関係数が 0 のとき、2 つの価値尺度の序列は無関係である。相関係数がマイナスになるのは 2 つの価値尺度が対立関係にあることを意味する。

3. 2 一群の価値対象に関わる複数の価値尺度の空間構造

価値尺度の類似度を相関関係で表現できるということは、尺度どうしの関係が価値尺度空間上の相対的角度によってあらわすことができることに対応する。2 つの価値尺度の相関係数を r とし、相対角度を θ とすれば、 $r = \cos \theta$ として表現できる。このとき $\theta = \arccos(r)$ となり、2 つの価値尺度を線分として表わせれば、その交わる角度を θ として空間上に描写できる。ある社会に内属する複数の文化について、それら文化が共通に識別する一群の対象に関わる価値尺度を収める空間を価値尺度空間とすれば、その次元数はその社会における価値の多様性をあらわすと考えることができる。

価値尺度空間の次元数が 1 のばあい、一群の価値対象には 2 つの価値尺度 ($\theta = 0^\circ$ (それ自身) と 180° (反転したもの)) しか存在しない。価値尺度空間の次元数が 2 以上になると、 0° , 30° , 45° , … など、無数の価値尺度が存在しうることになる。ただし、

はっきりと意味の異なる価値尺度は次元数の2倍—たとえば2次元のばあい 0° 、 90° 、 180° 、 270° の4つである。

30° 、 45° のような価値尺度は、明確に意味の異なる 0° 尺度と 90° 尺度の中間的な意味をもつことになる。それら中間的な尺度は別次元をなさないという意味で本質的ではないが、嗜好の混合的な多様性をあらわしているといえる。

3. 3 価値体系と文化集団

ある人びとがある価値尺度集合を共有するとき、その価値尺度集合を価値体系と呼び、価値体系を共有する人びとを文化集団と呼ぶことにする。ここで価値体系と文化集団は相互規定的であり、どちらがニワトリでタマゴなのかを一般的には決定できない。全体社会の集団分離が先で、それぞれの価値体系が発達する場合もありうるし、価値体系の変動が集団分離をもたらすかもしれない。ただし、かつて都築（2004）では社会階層にとって支配・服従関係が本質的であって、支配集団と被支配集団の分離は基底的な構造を作ると仮定した。そうした仮定に基づけば、価値体系も支配集団・被支配集団に随順していて、2つの文化集団が普遍的に存在すると考えられる。

このとき2つの文化集団が部分的にでも価値対象を共有しているとすれば、それらを序列づける価値尺度次元はどうなるだろうか。一群の識別対象についてそれぞれ一つずつ計2つの価値尺度しか関わらないとすれば、価値尺度空間の次元数の最大は2である。1次元で2つの価値尺度が逆向きのばあいもありうるが、価値序列が逆転した人びとがひとつの社会で共存しているのは病的である。2つの文化集団が存在するとき、鮮明な対立関係を避けるには価値尺度空間は2次元である必要があり、それぞれが 0° 尺度と 90° 尺度のような関係にあれば、対象価値の体系的な逆転関係を避けることができる⁽⁴⁾。

$0^\circ \cdot 90^\circ$ 関係はたがいの価値序列が無相関であり、2つの文化集団は一群の識別対象の価値序列をまったく共有できないことを意味する。2つの文化集団が、他の共有された識別対象に関する価値尺度についても全体として見てこのような関係にあるとき、2つの文化集団は「分離されている」と表現することにしよう。

しかし、2つの文化集団が分離されているとしても、その度合いは社会によって異なるかもしれない。それは、各文化集団を特徴づける価値尺度群の相対的な角度によって指標化しうる。理想的な支配文化集団と被支配文化集団の関係が $0^\circ \cdot 90^\circ$ であるとすれば、 $10^\circ \cdot 70^\circ$ はそれよりも分離は緩やかであり、 $30^\circ \cdot 60^\circ$ はさらに融合した関係である。

また、支配階層・被支配階層にそれぞれ集団分離からみた中心周辺構造を想定することもできる。たとえば支配階層中心に 0° 集団、周辺に 30° 集団があり、被支配階層中心に 90° 集団、周辺に 60° 集団があるような状況である。さらに角度分布を連続的と考えて、集団区分がファジイであるすることもできる。このばあいには、支配階層・被支配階層がグラデーションをもって相互浸透し、集団の明確な分離はなくなる。

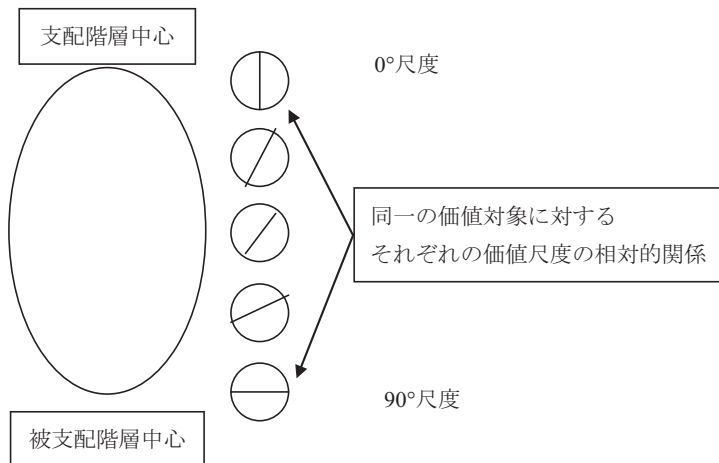


図3. 1 社会階層間の価値尺度関係

集団間の差異が明確に意識され対抗的に価値観が形成されるような社会では、実際に集団区分は非連続的であるかもしれないが、対抗的な集団の存在が意識されず、人びとが多様な文化消費を行なうとすれば、文化分布は連続的なものかもしれない。階級なき社会といわれる日本のようなばあい、人びとには具体的な集団の差異が意識されていない。社会的な格差が拡大しているといっても、実態はどうあれ、人びとの価値観が基本的には同一であるという信頼までが揺らいではいないだろう。

ところで、ブルデューの“古典的仮説”に代わって、最近の社会階層研究では文化的オムニボア仮説と呼ばれる考えが中心的な検討課題となっている。「オムニボア仮説とは、高階層の者は幅広い文化的活動を受容し自ら消費し、それが文化資本の一部になっているというもの」(中井 2008: 7)で、混合的な文化消費の在り方が分析されてきている。

1995年SSMデータを用いて日本社会の文化消費状況を分析した片岡(1998)は、ハイカルチャー・中間文化・大衆文化を隔てなく消費する文化的オムニボア層は54.0%を占め、他の混合的な文化消費者を含めると70%を超えること(「ハイカルチャー+中間文化」3.9%+文化的オムニボア層54.0%+「中間文化+大衆文化」19.6%=77.5% 片岡(1998: 27))、また文化的オムニボア化の度合いは「職業威信や教育の高さ、家族収入といった基本的な地位変数とはまったく関連性をもたない」(同: 33)ことを指摘している。

2005年SSMデータを用いた同様の分析では、中井(2008)が文化的オムニボア層の割合を45.6%、混合型の文化消費者の割合はオムニボア(45.6%)+大衆排除型(2.9%)+中間&大衆(31.4%)=79.9%と推計している。この分析でも階層指標のひとつとなる職業威信がオムニボア化におよぼす影響は限定的であることが示されているが、「教育が

ほぼ一貫して効果を持つ」(同：11)として、もうひとつの重要な階層指標である学歴が文化消費のパターンに影響すると述べられている。ただし、オムニボアの文化消費は「ハイカルチャーを行いかつ大衆文化も消費するような文化消費パターン」(同：9)と定義されていて、文化消費のパターンの分析は、たとえば「オムニボアか中間or大衆ユニボアか」を従属変数として行われている。このばあい、中間or大衆文化でないハイカルチャーを実践するかどうかには教育が影響していることになる。

Chan & Goldthorpe (2007) は文化的オムニボア仮説の検証をおもな課題としたものではないが(階級と地位のどちらが階層現象の影響を与えるかを検証したもの)、彼らの一連の「文化消費の社会階層分析」研究と同様イギリスにおける調査データを用いて、音楽、演劇・ダンス・映画、ビジュアル・アートの3つの文化活動領域におけるオムニボア・ユニボア消費パターンの分析を行っている。そこでも、教育はオムニボア消費を促進する効果を示している。

以上は一例を示したにすぎないが、文化的な混合状態が普遍的であることは共通の認識になりつつあるといえるだろう。しかしながら、その認識の焦点は高階層者がハイカルチャーを含む文化消費を行なうという点におかれていて、一般的な混合消費が射程に入っているとは言い難い。むしろ現代社会では、2文化連続体の多様性の中で、どの階級・地位にあってもそれぞれの位置を起点とした混合文化消費が可能であり常態である。低階層がユニボアと見えるのは、実は研究者の文化解像度が低いために混合文化消費が捉えられていないだけかもしれない。

3. 4 対抗文化運動の困難

対抗文化を定義しようとするとき、支配文化に反対するものとして定義しようとする、その価値体系間の関係を0°と180°のように捉えることになる。しかし、対抗文化が実際にはオルタナティブ・カルチャーであるとすれば、対抗文化をめぐる運動は支配集団の価値尺度に90°で交わるあらたな価値体系の形成であるのかもしれない。このようばあい、すでに被支配集団の文化が90°に設定されているとすれば、対抗文化がそこにも差異を求めようすると、被支配集団文化とも90°に交わる価値体系を形成しなければならない。それは2文化集団が占めていた2次元価値尺度空間を拡張してあらたな次元を創出し、そこに安定的な価値体系をもつ文化集団を形成することを意味する。

一般に、価値尺度空間の次元数は異なる文化のもとにある集団数だけありうるが、しかしながらその数は意味的世界の多様性によって制約されていると考えられる。一見異なる趣味に見えるものが同じ根をもつ嗜好であったり、新奇なものが古いものの復活であったりするのによく見られる出来事だろう。社会が単一次元の格差を表わす言説で満ちているとき、意味的世界の多様性は最低であって、価値尺度空間の次元数は1に張りついている。2文化集団の仮定は、こうした単純さを相対化しようとするものであり、

2次元の価値尺度空間は多様な混合的文化の存在を許容している。

価値尺度空間の次元を新たに付け加えることは、劇的に世界の多様性を増大させることとつながる可能性がある。しかし逆に考えれば、これは人びとの想像力の限界を超えようとすることであり、きわめて困難な営みであるとも予想される。ヒッピー文化の象徴であったジーンズがIT起業家のスタイルに取り込まれたり、新宿を埋め尽くした「フーテン」が庶民文化を代表する人物の形容詞となったりしたことは、この困難を反映しているのではないだろうか。

4. ブルデューの文化概念

ピエール・ブルデューは、『ディスタンクシオン』で文化集団を基礎に社会階層現象を説明している。これまで述べたことがらはブルデューの文化資本論と共通するところも多いが、支配階級の文化的な差異形成と卓越化戦略を強調し、庶民階級やその文化を劣位に置く点で違いがある。

4. 1 支配的価値の優位

ブルデューはいくつの文化集団＝階級を想定していたのか。『ディスタンクシオン』の大きな構成のなかには、支配階級、中間階級、庶民階級の3つがあらわれている。それぞれは生活条件を規定する資本総量、資本構造（経済資本、文化資本、社会関係資本の配列構造）、資本総量と資本構造の時系列変化（軌道：世代間再生産パターン）によって分類され（同訳書Ⅰ：178。以下、『ディスタンクシオン』の訳書をⅠ・Ⅱと表記し、訳書のページ番号を記す）、職業階層と結びつけられ細分化される。それでは基本的に3階級かといえば、「支配階級空間」と「中間階級空間」は資本総量において異なるだけで、資本構造その他においては「相同性」があるとも表現される（Ⅰ：187）。「…プチブル階級の人々の選択が…じつは支配階級の人々の趣味を組織だてている構造とほぼ同じ構造にしたがって組織されている」（Ⅱ：140）。文化内容の分類では「…差異のもとになっている真の要素は贅沢趣味（または自由趣味）と必要趣味との対立」（Ⅰ：272）、つまり「形式と実質」のどちらを優先させるかという記述からも、大きく分ければ①支配階級・中間階級と②庶民階級の2つであると考えられる。それでは支配階級（+中間階級）と庶民階級は文化的に相対的であるかといえば、下の記述はこの想定を否定している。

「被支配階級の人々が、種々の生活様式にその特徴を与える弁別的特性の所有化をめざす象徴闘争、そして特に、所有化されるに値する特性とは何か、その正統的所
有化様式とはいかなるものか、という定義をめぐる闘争に介入してくることがある

としても、それはあくまでも受動的な目印として、引き立て役としてのみである。この場合文化が形成されてゆくにあたって否定の対象となる自然とは、「大衆的」なもの、「庶民的」なもの、「通俗的」なもの、「ありふれた」もの、そうしたすべてにはかならない。」(Ⅰ：388, 強調原著者)

「…こうした文化(庶民文化)の存在を信じる人々がわざわざ探してみたとしても、…中略…あくまでばらばらの断片しか見出せないのであって、彼らが求めているようなカウンター・カルチャー、すなわち支配的文化にたいして実際に突きつけられ、ある身分の象徴あるいは他から切り離された生活の宣言としての意識的に要求された文化を見出すことはできないのである。」(Ⅱ：224)

ブルデューの対抗文化の定義はかならずしも明確ではないが、先ほど述べたような90°文化のようなものを想起させるところもある。

(真の対抗文化が存在するかどうか問われて)「ご質問にお答えできるかどうか分かりませんが、私が確信するところでは、文化的支配から身を守るために、あるいは文化によって、および文化の名において行使される支配から身を守るために、必要な武器をもつこと自体が文化の一部を形成しなければならぬはずだということです。そこで本当に問題になるのは、既成の文化に対して距離を取ることができる文化、それを分析できる文化なのであって、既成の文化を逆にする、あるいはもっと厳密に既成文化の逆転した形を押しつけるような文化なのではありません。」(『社会学の社会学』訳書：17)

庶民文化がカウンター・カルチャーではなく支配文化の「引き立て役」に過ぎないと言ってしまうということは、独立な文化次元があったとしても社会全体では1次元的に序列化されると主張することであり、対等な文化次元としての意義を認めない。このように、ブルデューの階級論では階級構造は支配的文化によって規定され、庶民文化は支配文化にたどり着けなかったものの残余カテゴリーになっているようである。

4. 2 庶民文化

階級構造にとって従属的なものであったとしても、ブルデューは具体的な庶民文化をどのようなものとしてとらえていたのだろうか。『ディスタンクシオンⅡ』「必要なものを選択——庶民階級」において、庶民階級のハビトゥスは「必要性=窮乏^{ネセシテ}」によって特徴づけられ、必要趣味が文化内容をなしていると記述されるのだが、それだけではない。

「飲み食いのしかたというのはおそらく、庶民階級がはっきりと正統的な処世術に

対立する数少ない領域のひとつであろう。やせるための節制という新しい倫理は、社会階級の上になればなるほど広く見られるものであるが、これにたいして農民層、そしてとくに生産労働者は、楽しい生活というモラルを対置する。生活を楽しむ人というのは、単によく食べよく飲むのが好きな人のことだけではない。それはあけっぴろげで打ち解けた関係、すなわち飲むことと食べることが共通してかもしだした象徴する、素朴で自由な関係、そしてそこでは仲間にはいったり無造作に振舞ったりするのを拒否することで相手との距離を示すような節度・ためらい・遠慮などが完全に消えてしまう関係、そうした関係にはいっていくべを知っている人のことなのである。」(Ⅰ：275、強調原著者)

ブルデューは、このような「実用的物質主義」は「目の前の現在の得がたい満足（「楽しい時」）をその日その日で求めてゆこうとする快楽主義」⇒「未来に期待すべきものをもたない人々」の唯一の哲学の構成要素と述べている。しかし、「楽しい生活」「あけっぴろげで打ち解けた関係」にはやや肯定的な響きがある。

「…必要性にたいする従属は、形式上の探究やいわゆる芸術のための芸術にはつきものの無償性と無意味さを拒否することによって、庶民階級の人々をプラグマティックで機能主義的な「美学」へと向けていく」(Ⅱ：196)

この引用や前後の文章にもやや否定的なニュアンスが込められているが、機能的であることは「美学」になっている。さらに次の記述の（ ）内は、あきらかに肯定的である。

「…たとえば生活の知恵、すなわち窮乏生活、苦痛、屈辱などの試練を経て獲得され、祖先から受け継がれてきた言葉、たとえ紋切り型であっても密度の高い言葉のうちに定着されている知恵があり、また享楽と祭りの感覚、自己表現と日々の生活における他者との連帯の感覚（庶民階級を特徴づける「陽気な楽天家の」^{ボン・グイヴアン}という形容詞が喚起するもの）があり、要するに、与えられた生活条件に適合する一形式とこれらの条件にたいする防御手段とを同時に構成する、現実主義的な（そして投げやりでない）快楽主義と懐疑的な（しかしシニカルではない）物質主義のうちに生まれるすべてのものがある。」(Ⅱ：223)

これにたいして、庶民階級にたいして支配的な位置にある中間階級には、地位上昇のために既存の関係を断ち切らなければならない宿命があると述べられている。言いかえれば、庶民階級にはそのような苦難はない。それは、吉川が記述する「高卒再生産家族」と共通する。

「プチブルがもっとも明白とは言わないまでももっとも大きな犠牲を実際に支払うのは、社交関係およびこれらと相関的に得られるはずの種々の満足に関してである。自分の位置はもっぱら自分の力によって得られたものであると確信している彼らは、自分を救うには自分自身しかあてにできないと信じている。各人が自分のために、各人が自分の家に、というわけだ。努力を一点に集中しコストを切り詰めようとするあまり、個人的上昇の障害となるような人間関係はたとえ家族関係であっても断ち切るよう、彼らは導かれてゆく。」(Ⅱ：131)

これらの記述からは、庶民文化が「ヤンキー文化」の特徴として示されているものと近い関係にあることがわかる。すでに述べた朝日新聞の記事には、「地域で楽しく生きようとする」「学校では反発しても労働現場では従順」「よさこい祭りがいい例」「仲間意識」「納得すればやり抜く」などの表現が、この下位文化を特徴づけるものとしてあげられているからである。

支配・被支配関係を再生産する契機としての文化という視点からすると、上昇プロセスを積極的に促さない——むしろ、選別過程で非適合的な役割を果たすという意味で庶民文化そのものの内容は2次的なものである。しかし、そうした文化のもとにある人びとが人口の5割を占め、その価値的世界が対抗的な生活世界を構成するとしたら、少なくとも文化現象として無視することはできない。また、そうした対抗的生活世界において支配文化が相対化されているとすれば、「支配者層によって押しつけられた正統性」⁽⁵⁾だけを階層化の根拠とする社会階層研究は一面的なのかもしれない。ブルデューの記述自体からそのような理論的展開の方向を読み取ることは難しいが、支配・被支配関係に進んで取り込まれている中間階級の記述の厳しさに比して、庶民階級の独自性にはより穏やかな視線が向けられている。

5. 価値尺度間関係の分析

ブルデューの文化資本論を検証しようとする試みは日本においても盛んに行われ、いくつかの文化活動項目にたいして、階層別の文化消費形態の違いや文化活動項目間の差異が分析の対象になった。この節の目的は、そうした研究結果から文化活動項目序列の階層間類似性を分析し、価値尺度空間の構造を検討することにある。

5. 1 文化評価スコアの分析

片岡栄美(1996)は職業威信スコアと同様の手順で、21の文化項目について、その序列を示す文化威信スコア、あるいは集団ごとに計算した文化評価スコアを算出している⁽⁶⁾。この分析結果(片岡 1996：5 表1「文化評価スコアと諸属性」)を用いて、

支配階級、中間階級、庶民階級の価値尺度間の空間的關係に検討を加えることにしよう。

文化活動項目それぞれについて集団ごとに計算された回答の平均＝文化評価スコアは、性別2区分、職業による3区分（専門・管理、事務・販売、ブルーカラー）と学歴による3区分（大卒、高卒、中卒）ごとに計算されている。表5.1、表5.2は、性別ごとの結果を除いた、職業別・学歴別の文化評価スコアの相関係数を示している。片岡はスピアマンの順位相関係数を計算しているが、ここではピアソンの積率相関係数を用いた⁽⁷⁾。

表5. 1 職業別・文化評価スコアの相関係数

| 職業階層 | 相関係数 | |
|-------|-------|--------|
| 全体 | 事務・販売 | ブルーカラー |
| 専門・管理 | 0.974 | 0.913 |
| 事務・販売 | | 0.954 |

表5. 2 学歴別・文化評価スコアの相関係数

| 学歴階層 | 相関係数 | |
|------|-------|-------|
| 全体 | 高校 | 中学 |
| 大学 | 0.971 | 0.909 |
| 高校 | | 0.951 |

いずれの表にあらわれる相関係数も社会学的データ分析の水準からはきわめて高く、どの集団においてもほぼ同一の価値序列があるように思われる。この相関係数を、尺度間の角度情報に変換してみよう。

表5. 3 学歴別・文化評価尺度の相対角度

| 職業階層 | 角度(°) | |
|-------|-------|--------|
| 全体 | 事務・販売 | ブルーカラー |
| 専門・管理 | 13.0° | 24.1° |
| 事務・販売 | | 17.5° |

表5. 4 職業別・文化評価尺度の相対角度

| 学歴階層 | 角度(°) | |
|------|-------|-------|
| 全体 | 高校 | 中学 |
| 大学 | 13.8° | 24.6° |
| 高校 | | 18.0° |

表5.3、表5.4から、もっとも遠い階層間の価値尺度間は、25°ほどの角度で交わっていることが分かる。支配文化と被支配文化の理念的価値尺度角度である90°に比べると、ずっと小さなものである。次元数については、3階層の価値尺度間の角度（A, B,

C) に、 $A+B=C$ のような関係があれば2次元を主張できると考えられるが、職業別では $13.0+17.5=30.5$ (>24.1)、学歴別では $13.8+18.0=31.8$ (>24.6) と食い違いは $5^{\circ}\sim 6^{\circ}$ ほどあり、いずれもぴったり2次元に納まるとはいえない。

5. 2 日本の趣味の分析

21項目すべての文化活動を一括した分析では、かならずしも予想された結果は導かれなかった。これにはさまざまな原因が考えられるが、ひとつには調査の対象になっている文化活動項目に相互に異質なものが含まれていることをあげることができるだろう。そこで、これら文化活動項目のなかから比較的等質的なものだけを集めた分析を試みる。21項目のなかで、等質的であって項目数が多いのは日本の趣味と呼べるようなものである。該当するのは「歌舞伎や能を見に行く」「茶道・華道」「短歌や俳句を作る」「民謡を唄う」「囲碁・将棋」「落語、漫才をきく」「新劇・大衆演劇を見に行く」「演歌歌手の公演やショーへ行く」の8項目である。

表 5. 5 職業別・日本の趣味の相関係数

| 職業階層 | 相関係数 | |
|-------|-------|--------|
| 全体 | 事務・販売 | ブルーカラー |
| 専門・管理 | 0.955 | 0.862 |
| 事務・販売 | | 0.962 |

表 5. 6 学歴別・日本の趣味の相関係数

| 学歴階層 | 相関係数 | |
|------|-------|-------|
| 全体 | 高校 | 中学 |
| 大学 | 0.960 | 0.841 |
| 高校 | | 0.907 |

表 5. 7 職業別・日本の趣味の相対角度

| 職業階層 | 角度($^{\circ}$) | |
|-------|------------------|-----------------|
| 全体 | 事務・販売 | ブルーカラー |
| 専門・管理 | 17.2 $^{\circ}$ | 30.4 $^{\circ}$ |
| 事務・販売 | | 15.9 $^{\circ}$ |

表 5. 8 学歴別・日本の趣味の相対角度

| 学歴階層 | 角度($^{\circ}$) | |
|------|------------------|-----------------|
| 全体 | 高校 | 中学 |
| 大学 | 16.2 $^{\circ}$ | 32.7 $^{\circ}$ |
| 高校 | | 25.0 $^{\circ}$ |

分析結果（表5.5，表5.6，表5.7，表5.8）を見ると、いずれも中・上層階層と庶民階層との差が広がって30°ほどとなっており、先の分析結果よりも階層間の文化的差異は大きくなっている。尺度間の関係は職業別では $17.2+15.9=33.1$ （ >30.4 ）で食い違いは2.8°，学歴別では $16.2+25.0=41.2$ （ >32.7 ）で食い違いは8.5°となって，職業階層ごとの価値尺度空間次元が2次元に近づいている。

等質な文化活動項目を選ぶことによって，階層ごとの価値尺度の違いが広がり，部分的に2次元構造に近づいたが，まだ十分な結果ではない。これは，日本社会の階層間文化的異質性が小さいことを示す結果とも言える。しかし，先に述べたように日本社会の文化価値尺度分布が連続的だとすれば，支配階層の極にある人びとと庶民階層の極にある人びとの価値尺度の違いは大きく出るはずであっても，中間的な価値尺度をもつ人びとも数多くいることになるので，そうした人びとを平均した階層間の文化的差異が小さくあらわれているのかもしれない。

さらに，別の可能性もある。文化威信スコアと同等の方法で構成される職業威信スコアは，やはり集団分割にたいして頑健な構造をもつことが知られている。しかし，ひとつの尺度と見える職業威信尺度は，複数の異なる尺度の合成と見なすこともできる。都築（1998a）は，職業威信評定には5つの要素的な次元が関わっていることを示しているが，その相互の関係を尺度間の相対角度であらわすと次のようになる。

表5. 9 職業評定尺度間の関係

| | 第2 | 第3 | 第4 | 第5 |
|----|--------|--------|--------|--------|
| 第1 | 118.1° | 24.4° | 33.3° | 68.7° |
| 第2 | | 111.3° | 124.5° | 129.3° |
| 第3 | | | 28.4° | 68.1° |
| 第4 | | | | 54.3° |

都築（1998a: 78）表3. 3から1995年調査データについて計算

第1，3，4尺度（貢献，技能，報酬）はそれぞれ30°前後で交わっていて，職業威信スコアとも相関が強く，鼎のように職業威信尺度を支えている。ところが，第2尺度（創造性）は1，3，4尺度いずれとも120°前後で，第5尺度（かっこよさ）は50～70°で交わり，これら第2，5尺度も130°ほどで交わっている。第1，3，4尺度を大まかに1つの次元と見なせば，全体としては大きく3次元構造をなしていることになる。

ここから推測されるのは，同じように文化威信スコアも多次元構造をなしていて，分解すれば支配文化価値とは異なる次元が析出できるかもしれないということである。庶民階級が支配階級と異なる次元にとくにコミットしていても，強力な支配文化価値次元と重ねあわされることで検出できない可能性がある。文化価値尺度の構造については，もう少し詳細な分析が必要だろう。

6. 結 語

はじめに設定した問題は、なぜ年収200万円未満でも30%近くの子どもたちは大学に進学し、逆に、年収1,200万円以上でも1/4以上の子どもたちは大学に進学しないのかであった。これにたいして、どのような社会にも支配文化とは異なる文化があること、支配文化のもとに育てば困難があっても大学進学を動機づけられ、それとは異なる庶民文化のもとに育てばどんなに容易であっても「あえて進学しない」というのがここでの暫定的な答えである。ただし、それは完全な関係ではない。

映画版「フーテンの寅さん」第1回は、「さくら」と「博」の結婚エピソードが中心となって展開する。「さくら」は下町柴又に生まれ育った娘だが「博」は屈折した青年である。博はタコ社長の印刷工場では優秀な技術者であり多くの従業員のまとめ役であるが、「労働者諸君」のひとりである。ところが、彼の父は二人の結婚式の受け付けに「北海大学」農学部・名誉教授の名刺を示して上層階層に属していることをあきらかにする。博とさくら夫婦には一人息子「満雄」が生まれるが、彼は大学を出てサラリーマンになり、恋多き青年として苦悩し、たびたび「寅さん」のやっかいになる。

おいちゃん夫婦とさくらは、庶民階級ということができるが、博・満雄は2代で大卒→非大卒、非大卒→大卒と学歴分断線を越えていることになる。日本社会における学歴分断線が描く状況は、ブルデューが描こうとしたフランス社会の階級構造とは異なっている。2つの文化集団を前提としながら、そのあいだの行き来が容易で上流文化スノビズムが分断を明瞭には特徴づけない。日本社会はブルデューの表現でいえば相対的に「階級分化のない社会」であるのかもしれない。じっさい、階層間の移動障壁は低く、両者は交わって「高度に婉曲化された」階層構造を作り出していると言えるだろう。

「ここに、階級分化の明確な社会の正統的文化と、ほとんどあるいはまったく階級分化のない社会の文化との違いがあるのだ。つまり前者は支配者をはっきり表現し正統化しようとする支配の産物であるのにたいし、後者のような社会では文化的遺産の所有手段がほとんど誰にとっても同じように入手できるため、文化はその集団のあらゆるメンバーによってほぼ同じように支配され、その結果文化資本として、すなわち支配の道具としては機能できないか、あるいはたとえ機能できたとしても、きわめて限られた範囲内で、しかも高度に婉曲化されたかたちでしか機能できないのである。」(Ⅱ：350)

「フーテンの寅さん」は、東京大学出の山田洋次監督と寡黙で読書好きの渥美清が作り上げた庶民映画である。このシリーズのなかには、大学関係者という設定の人物が多く登場する。東京大学や早稲田大学キャンパスが背景となることもある。多くのばあい、

ハイカルチャーは尊敬すべきものではあるが、むしろ「浮世離れした」滑稽なものとして描かれる。それは、庶民の鏡に映し出された支配階層像を支配階層の人間が表現したものであって自虐であるが、庶民階層に圧倒的に受け入れられた。この入り組んだ関係こそが、日本社会の階層状況をあらわしている。

注

- (1) 学歴下降回避のメカニズムについては、吉川（2006）4章「因果構造を読み直す」に詳細な説明がある。それを合理的選択理論とすることについては、自ら「数理社会学における合理的選択理論で通常期待されるようなデリヴェーション（論理展開の意外性）の面白さはもちあわせない」（同：138）と述べて、限界があることを認めている。また2005年SSM調査の報告書において古田（2008）は、学歴下降回避あるいはそのベースとなった相対的リスク回避説の検証を行っているが、子どもの進学にたいしては親学歴の効果とともに家庭の経済的資源の効果があることを示し、「学歴下降回避が最も重要なメカニズムとはいえない」（同：95）と結論づけている。古田が「経済的資源」としているのは、持ち家、風呂、応接セット、ピアノ、テレビ、ラジオ、冷蔵庫、電話、文学全集・図鑑、乗用車、美術品・骨董品などの所有状況であり、これは文化資本と呼ぶことができるようなものでもある。
- (2) 「学歴の象徴的価値」について吉川は「…学歴が、切符やパスポートのように実際に使うためのものではなく、努力や能力の指標、身につけた教養のシンボル、そして社会的地位の上下を示すラベルとして奥深い意味をもっているということです。」（吉川2009：140-1）としている。それは「実質」としての意味ではなく「形式」としての意味であるという点において、支配階級の文化に属している。
- (3) 序数あるいは基数に限定しなくても、価値空間の構造が比較可能ならば価値尺度の類似度を定義できるかもしれない。
- (4) たとえば130°のように90°以上の価値尺度は、支配階層文化が規定する価値序列に反対する部分を含んでいることになる。このような価値尺度を含む価値体系は、その意味で反社会的である。同じように、180°以上の価値尺度は被支配集団の価値序列に反対する。このような価値尺度について、もし「きれいはきたない、きたないはきれい」という見方に普遍性があるとすれば、180°尺度は0°尺度の影のようなものであり、270°尺度も90°尺度の影であると考えることができ、主要文化に一体化することができる。ここでは結論を導けないが、暫定的に上のように考えて90°以上の価値尺度を明示的には扱わないことにする。
- (5) 「…どの社会にも支配—被支配関係が存在する以上、文化を階層化する権利を行使できるのはその時点で支配的な位置を占めている人々だけであり、被支配的な位置に追いやられている人々は、支配者層によって押しつけられた正統性の定義を無条件に甘受するしかない」（石井 1993：190-1）
- (6) 「質問文は「ここにいろいろな文化的活動がかいてあります。これらの活動を評価する基準はいろいろありますが、いまかりにこれらを高いとか、低いとか区別を付けて順に分けるとしたら、どのように分類されるでしょうか」片岡（1996：19）で、回答は「非常

- に低い」から「非常に高い」まで5段階で、各回答に0, 25, 50, 75, 100を割り当てて平均して求められたのが文化威信スコアあるいは集団別の文化評価スコアと思われる。
- (7) 文化威信スコアが職業威信スコアと同じ構造をもつとすれば、それは序数ではなく基数的な意味をもちうると考えられる(都築 1998b)ので、ここでは順位相関係数ではなく積率相関係数を用いることにする。

文献

- 朝日新聞 2009.7.31付朝刊「親の年収 進学率左右」
- 2009.8.1付朝刊「文化特捜隊—ヤンキー文化論、なぜ注目」
- Bourdieu, Pierre 1979, 1982 *La Distinction Critique Sociale du Jugement*, Minuit (=1990 石井洋二郎訳『ディスタンクシオンⅠ・Ⅱ』藤原書店)
- 1980 *Questions de Sociologie*, Minuit (=1991 田原音和監訳『社会学の社会学』藤原書店)
- Chan, Tak Wing and John H. Goldthorpe 2007 “Class and Status: The Conceptual Distinction and its Empirical Relevance”, *American Sociological Review*, Vol.72 August: 512-32
- Ehrenreich, Barbara 1989 *Fear of Falling: The Inner Life of the Middle Class* (1995=中江桂子訳『「中流」という階級』晶文社)
- 古田和久 2008「教育機会の不平等生成メカニズム」
- 米澤彰純編著 2008『2005年SSM調査シリーズ5 教育達成の構造』科学研究費補助金特別推進研究「現代日本階層システムの構造と変動に関する総合的研究」成果報告書：81-97
- 五十嵐太郎編著 2009『ヤンキー文化論序説』河出書房新社
- 石井洋二郎 1993『差異と欲望——ブルデュー『ディスタンクシオン』を読む』藤原書店
- 片岡栄美 1996「階級のハビトゥスとしての文化弁別力とその社会的構成—文化評価におけるディスタンクシオンの感覚—」『理論と方法』Vol.11, No.1: 1-20
- 1998「現代日本の文化的消費にみる象徴的境界—エリートからコーポレート優位へ—」片岡栄美編著 1998『1995年SSM調査委シリーズ18 文化と社会階層』科学研究費補助金特別推進研究「現代日本の社会階層に関する全国調査」成果報告書：15-44
- 荻谷剛彦 2001『階層化日本と教育危機——不平等再生産から意欲格差社会へ』有信堂
- 吉川徹 2006『学歴と格差・不平等』東京大学出版会
- 2009『学歴分断社会』ちくま新書
- 南田勝也・辻泉編著 2008『文化社会学の視座』ミネルヴァ書房
- 宮島喬 1994『文化的再生産の社会学——ブルデュー理論からの展開』藤原書店
- 中井美樹 2009「階層化、ジェンダー化された消費ライフスタイルと文化資本」菅野剛編著 2008『2005年SSM調査シリーズ10 階層と生活格差』科学研究費補助金特別推進研究「現代日本階層システムの構造と変動に関する総合的研究」成果報告書：1-28
- 難波功士 2009『ヤンキー進化論—不良文化はなぜ強い』光文社新書
- 都築一治 1998a「職業評定のモデルと職業威信スコア」『職業評価の構造と職業威信スコア』『現代日本の社会階層に関する全国調査研究』成果報告書：69-86
- 1998b「職業威信スコア構成手続きの意味——真の威信尺度と調査データから構成さ

れた威信尺度との関係——」『職業評価の構造と職業威信スコア』「現代日本の社会階層に関する全国調査研究」成果報告書：181-94

——— 2004「準階層とその構成に関する仮説的検討」『流通経済大学社会学部論叢』Vol.15, No.1: 1-20